

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 26 日現在

機関番号：12702

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26870205

研究課題名(和文) タイにおける山地民の都市への適応に関する研究

研究課題名(英文) Current status of Mien people working in urban areas: Case study of a hillside village in northern Thailand

研究代表者

増野 高司 (MASUNO, Takashi)

総合研究大学院大学・先端科学研究科・客員研究員

研究者番号：40569159

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、タイ北部のパヤオ県に位置するミエン族が暮らす山村(P村)を事例として、出稼ぎ者とその就労先を訪問することから、彼らの都市での暮らしぶり、そして出稼ぎ者たちと彼らの母村との関係、を明らかにすることである。調査の結果、P村の村民は、東北タイを中心にタイの全国で働いていた。就労内容を見てみると、都市部において豆乳販売業に従事している者が最も多かった。都市部に出稼ぎに出ている村民たちは、彼らが供犠として利用する家畜の購入、さらに村に残してゆく彼らの農地の貸与や管理を通じ、P村で農業を中心に生活を営む村民たちの生業活動に影響を与えていることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)： The research objective is to clarify the current status of the Mien people living in the urban areas of Thailand. The research was conducted at a Mien hillside village in Phayao Province of northern Thailand. The results are as follows: The villagers work in not only the Bangkok area but also other areas within the country. Specifically, many villagers work in Khon Kaen province of northeastern Thailand and are engaged in selling soybean milk at street stalls. The villagers working in urban areas affect the economic activities of their home village by buying sacrificial animals and renting agricultural land in their home village.

研究分野：地域研究 文化人類学

キーワード：ミエン ヤオ族 少数民族 生業 出稼ぎ インフォーマルセクター 豆乳 高齢化

1. 研究開始当初の背景

タイ北部の山地民社会は、1990年代以降、大きな転換点を迎えている。その1つが焼畑の衰退であり、常畑での換金作物栽培についての研究は申請者を含めて蓄積がある。もう1つの変化が都市への出稼ぎに出る者の増加である。

ミエン族の社会において、都市部への出稼ぎは、若者を中心に定着しつつある。山地民の出稼ぎ者たちは、文化的背景の異なる都市の就労先での暮らしを余儀なくされている。また、山村には出稼ぎから帰村する者があるいっぽうで、長期に帰村しない者も現れており、都市と農村との関係は、出稼ぎを通じ、ますます近づいている。出稼ぎは、すでに山地民の主要な生業のひとつであり、出稼ぎ者の暮らしの実態、そして彼らが抱える問題の把握は、山地民社会の変容を考えるうえで無視できない問題となっている。しかしながら、出稼ぎ先と農村の双方で現地調査をおこない、都市=農村関係を明らかにする研究は行われてこなかった。

2. 研究の目的

本研究では、ミエン族の山村を事例として、実際に出稼ぎ者と就労先を訪問することで、出稼ぎ者たちの就労内容、出稼ぎ者が就労先で抱える問題、その問題への対応、を把握し、山地民の都市への適応を明らかにすることを目的とする。同時に、出稼ぎ者と母村との関係を把握し、都市での生業活動が山地民社会に及ぼす影響を考察する。具体的には、以下の3点を把握する。

第1に、出稼ぎ者を含めたP村の村民の就業状況を把握する。また、P村の各世帯が営む生業における各人の役割を把握することから、出稼ぎ者の世帯内での役割や、各世帯における常畑化にともなう土地相続の問題など、各世帯が出稼ぎ者を送り出す事情、についても把握する。

第2に、山地民の都市への適応方法を把握する。具体的には、全村民の就業状況を把握したうえで、P村からの国内への出稼ぎ者を申請者が実際に訪問し、山地民であるP村の者が、村外のタイ社会において、いかに就労の場を見出したのか、労働環境および、住居などの生活環境を把握すると同時に、山地民であるが故の苦悩をはじめ、彼らが就労先で抱える問題、そして、出稼ぎ先での村人同士の相互扶助など、その問題への対応を把握することで、出稼ぎ者各人の都市への適応方法を明らかにする。

第3に、出稼ぎ者と母村との関係から、都市=農村関係を把握する。具体的には、母村への送金実態や母村との連絡頻度の把握、そして村から送り出す側の事情および出稼ぎに出た者の事情の分析を通じ、両者の関係を経済的側面および社会的側面から明らかにする。さらに、出稼ぎ者への聞き取りから、各人の母村への帰村に対する意識について、

将来的な見通しを示す。

3. 研究の方法

調査対象は、タイ北部のミエン族が暮らす山村(P村)および出稼ぎ者を含むP村の全村民である(全体で22世帯に130名)。現地調査はP村およびP村の出稼ぎ者が暮らすタイ国内各地の都市部で実施する。

村民の就業状況の把握

P村の各世帯を訪問し、世帯主などへの聞き取り調査から、村外で暮らしている者も含めた全ての村民について、聞き取り調査から、その就業状況を把握する。

家族を出稼ぎに送り出す側の事情の把握

P村で暮らす世帯の生業複合の現状を把握する。どのような者が出稼ぎに出たのかを明らかにするために、聞き取りから各人の世帯内における社会的な役割や、各世帯における常畑での換金作物栽培の拡大にともなう土地相続の問題、などを把握する。

都市部での暮らしの実態および彼らが抱える問題の把握

ミエン族である村民が、文化的背景の異なる都市部のタイ社会において、いかに生業を見込んでいるのかなどを、出稼ぎ者を訪問し、参与観察および聞き取りから把握する。とくに村人の多くが関わる、都市部の路上における豆乳販売業の実態について調査を実施する。

出稼ぎ者と母村との関係の把握

出稼ぎ者への聞き取りを中心に、母村への送金の実態、電話など母村への連絡の方法と頻度を把握することから、出稼ぎ者と母村であるP村との関係を把握する。さらに、聞き取り調査から、P村に戻ることを前提とした就労(いわゆる出稼ぎ)なのか、それとも村外への移住なのか、出稼ぎ者たちの現状の見通しを明らかにする。これらの結果と全体の結果とを合わせ、都市での生業活動が山地民社会に及ぼす影響、および都市=農村関係を考察する。

4. 研究成果

P村の村民の就業状況

2016年にP村の村民のうち、少なくとも34人が村を離れ、タイ国内の都市部での労働に従事していること明らかになった。その職種と人数をみると、豆乳販売業(23人)、土木作業員(3名)、工場内作業員(3名)、学校の教員(1名)、看護師(1名)、食堂の給仕(1名)、ヘアースロンの美容師(1名)、喫茶店の給仕(1名)など、豆乳販売業を中心に、多様な仕事に従事していた。

出稼ぎ先での職種をみると、全体的には単純な肉体労働に従事する者が多いものの、タイの大学を卒業し、学校の教員や看護

師として働く村民もいることが確認できる。学校の教員や看護師として働く村民は、タイの社会のなかで、インフォーマルな労働ではなく、フォーマルな労働に従事することに成功したミエンといえる。

調査の結果、P村出身者の多くが豆乳販売業に従事していることが明らかになった。しかし、私はP村の村内で豆乳を作る者を見たことがない。実際にP村で聞き取りをしてみても、P村の者が、もともと豆乳を作る技術を持っていたわけではないとのことだった。聞くところによると、P村の村民の知り合いのなかに、豆乳販売業で成功した者がおり、その豆乳作りの方法や販売のノウハウが、村民同士の間で徐々に広まっていった結果、豆乳販売業に従事する者が多くなったものだった。

出稼ぎに出た者たちがどの地域で働いているのかをみると、土木現場、部品組み立て工場そしてヘアサロンで働く者たちは、バンコクおよびバンコク周辺の都市で働いていた。東北タイで豆乳販売業に従事する者が多いことから、全体的にみると、コンケンをはじめとした東北タイで働く者の割合が最も高い結果となった。

このほか、韓国(3名)を中心に海外に出稼ぎに出る村民も一部に確認できた。しかし、2005年頃とくらべ、2016年には、P村の村民の海外への出稼ぎに対する関心は減少しているといえる。これは豆乳販売業をはじめとした国内での出稼ぎが好調なことが、影響していると考えられる。

P村の村内について見ると、2016年に、P村の約13戸が農業を中心とした暮らしをしていることが明らかになった。2005年頃には、約20戸が農業を中心とした生活をしてきたことから、農業に従事する家の戸数は大きく減少したと判断できる。この減少には、豆乳販売業を目的として家族ぐるみで村を離れた世帯(3世帯)などが、大きな要因となっていた。

村の農業について詳しく見てみると、自給用に陸稲を栽培し、換金作物としてトウモロコシが栽培されていた。この陸稲とトウモロコシの組み合わせは、私がP村を初めて訪問した2003年においても、一般的に見られた栽培作物の組み合わせである。また、2015年には、ゴム樹脂の採集やコーヒーの栽培も村人の現金収入源になっていることが確認できた。このゴムおよびコーヒーは、この10年程度のうちに村人の生業として広まったものである。このほか、各世帯が庭先でニワトリおよびブタの飼育を継続しており、後述するが、都市部に働きに出る村民が増えるなかで、ニワトリやブタが現金収入源となっている事例が確認できた。

高齢者の存在と出稼ぎ

出稼ぎ者を送り出す世帯について調査した結果、親世代が農業に従事できる世帯では、

その子供たちは積極的に都市に出て労働に従事していた。これは都市部で働いた方が、確実な現金収入となり、大きな収入を得ることができることが多いためである。現在10代後半から20代の若者たちは、タイの義務教育を終え、ほとんどの者が高校も卒業している。このため、現在のミエンの若者たちは、村内ではミエン語を話しているものの、村外でのタイ語の使用も特に問題を持たない者が多く、若者が都市に出て働きたいと考えることは、ごく一般的なことになっている。そして彼らの親世代も、子供たちが都市で働くことを望んでいるように感じられることも多かった。

私が、都市で働く者を訪問して話を聞いた際に、彼らから、炎天下のなかでのトウモロコシ栽培に関する農作業が、いかに重労働であるか度々説明された。これは都市部で働く者の多くが、都市での労働のほうが、労働内容はさまざまであるものの、山地でおこなう農作業よりも身体的に楽な労働だと考えられていることを反映したものと見えるだろう。都市での労働が、山村での農作業よりも身体的に楽な場合が多い可能性が指摘できる。

本研究を開始する以前には、都市に出て行く者ばかりを注目していたが、調査を続けてみると、都市での労働をやめて村に帰ってくる働き盛りの者もいることが明らかになってきた。親世代が農業に従事できる間に、子供たちが都市部に働きに出ることをすでに述べたが、親世代が高齢になり、農業を続けることができなくなった場合、働き盛りの若者が、農業に従事しながら親の日常の世話もするために、村に戻ってきた事例が複数確認できた。若年層の都市への進出が一般化するのと同時に、村に残る親世代の高齢化が進んでいる。都市部での労働を続けるか、それとも村に戻り親の面倒をみながら農業に従事するか、の選択を求められる者が現れている。

出稼ぎ者たちの都市での暮らし

調査の結果、都市部で働く村民の多くが豆乳販売業に従事していることが明らかになった。東北タイでの豆乳販売業を見てみると、彼らは、午前中に各世帯が家で豆乳を作り、夕方から夜にかけて市場や人通りの多い繁華街の路上に設置した屋台で販売を行っていた。豆乳を夜に販売する世帯の場合でも、夜10時頃には店をかたづけ帰宅していた。豆乳販売の仕事は、規則正しく健康な生活を営むことに無理のない範囲でおこなわれていると判断できる。なによりも、豆乳販売業は自営業である。豆乳販売業は、雇用者が存在する日雇いの仕事などと比べて、身体的にも時間的にも「自由度」が高い仕事といえる。豆乳を作る材料は、町のスーパーや商店で販売されているものを購入しており、入手が難しい材料は利用していなかった。

夕方もしくは夜間に豆乳を販売する世帯

が多く、朝に販売する世帯は少なかった。常設の朝市での、豆乳販売業への新規の参入は古参の業者が存在するため、難しいようである。豆乳は、ひと袋7パーツ程度で、トッピングの種類によって、ひと袋20パーツ前後で販売されていた。豆乳屋台ではあるが、生姜湯や温めた牛乳も販売する世帯もあった。豆乳の単価は安いものだが、客によっては、数袋をまとめて購入する人も多く、1度の販売で数十パーツのお金が動くことも多かった。また、夕暮れ時には、屋台の前に列ができるほど客が来る店もあり、一日あたりの利益が2000パーツを超える事例もみられた。そのいっぽうで、売れ行きが低迷し、一日の利益が400パーツ程度の事例も確認できた。このような利益の違いは、材料や場所の使用料には大きな違いがみられないことから、単純に販売した豆乳の量の違いから生じるものである。観察してみると、豆乳がどれだけ売れるのかは、販売する場所による影響が大きい。良い販売場所を見つけることができるかどうか、路上での豆乳販売業の成功の鍵となっていると考えられた。

都市部に暮らすミエンの人びとが抱える問題

豆乳販売において、その販売場所の選択が重要であることから、豆乳が良く売れる場所をめぐって、P村の出身者とP村ではないミエンの村の出身者との間で、場所取りの競合が起きている場所があった。そのいっぽうで、豆乳販売を成功させている者のなかに、次々と的確によく売れる場所を見つけ出し、店舗を増やすことに成功している者があった。

P村の出身者によると、豆乳販売業に従事するミエンはナーン県の者が多いとのことだった。各地でナーン県出身と考えられるミエンの者が豆乳販売を行っていた。P村の出身者たちは、豆乳販売業に参入したミエンの人びとのなかでは、かなり後発のグループである。

豆乳を販売しているとき、ミエンの者同士はミエン語を用いてコミュニケーションを取ることが多かった。P村の出身者たちは、一般のタイ人の人びとに対し、彼らの出自を積極的に秘密にしているわけではないように見えた。

P村の人びとは、長い間ウルチ品種の陸稲を栽培し、これを食用としてきた人びとであることがわかっている。調査を開始した時点では、都市部に暮らすP村の人びとが、都市部においてもP村で収穫された陸稲を食べていることや、食べたいと考えていることを予想していた。しかし、実際に都市部に暮らすP村の者に、聞いてみたところ、米をはじめ食べ物に関して、都市に来てから問題を感じている者はみられなかった。彼らが暮らす町で売っているウルチ米、食材そして出来合いのお総菜を食べることができれば、美味しいし、満足しているとのことだった。毎日の食

事を自炊するのか、出来合いのお総菜を買って済ますかは、各世帯の考え方によって異なっていた。

さらに、本研究を開始する以前には、都市部に暮らすミエンの人びとが、一般のタイ人（いわゆる仏教を信仰するタイ語を第一言語とする人びと）との間に何らかの大きな問題を抱えていることを予想していた。しかし、P村出身者の人びとが一般のタイ人と問題を起こすことを望んでいないこと、そして意識的に問題が起きないようにしていたこともあるのだろうが、P村の者と一般のタイ人との間に、特別な問題を発見することはできなかった。P村の出身者のなかには、工場で働くなかで、一緒に働く東北タイ出身のタイ人と結婚する男女もみられた。調査を通じ、ミエンの人びとと一般のタイ人との間には、軋轢よりも、むしろ良好な関係を見いだすことが多い印象を受けた。

そのいっぽうで、P村の者の一部が問題としていたのは、同じ豆乳販売業に従事するナーン県を中心とする他県出身のミエンの人びととの競合関係だった。同業の同じミエン族の人びとのほうが、一般のタイ人よりも競合関係になりやすい可能性が指摘できる。

出稼ぎ者と母村との関係

出稼ぎには、大きな現金収入が期待されることがあるが、都市に出稼ぎに出ても、全ての出稼ぎ者が成功しているわけではない。豆乳販売業を例にしてみても、販売の低迷が続く世帯もあり、出稼ぎに出た者のなかにおいても、その収入の格差は非常に大きい。出稼ぎに出るにあたり、その収入は大事であるが、若者の場合は、少し事情が異なる場合がある。若者にとって、山腹に位置する田舎の村を離れ、タイの都市に暮らすことは、憧れでもあるのだろう、収入そのものよりも、都市での暮らしへの強い興味から出稼ぎに出ているように見える者もいた。

そのいっぽうで、結果で指摘したように、出稼ぎを続けるかどうか、出稼ぎに出ることができかどうかの判断には、母村で暮らす親世代の高齢化の問題、具体的には親世代の健康問題が大きく関わっていた。村を離れる者がいるいっぽうで、村に戻って来る者も確認できた。

今回の調査では、ミエンの人びとがおこなう儀礼において、出稼ぎの影響を確認することができた。ミエンの人びとは、一般のタイ人とは異なる、祖先祭祀を中心とするミエン独自の信仰を持っている。ミエンの人びとは、彼らの正月や、彼らが必要と判断したときに、ニワトリやブタを供犠として利用して、さまざまな儀礼をおこなう。2015年においても、P村の人びとは日常的に、さまざまな儀礼をおこない、家畜を供犠に利用していた。しかしながら、出稼ぎに出たミエンの人びとは、出稼ぎ先には家畜を飼育していないし、なによりも儀礼をおこなうことができる祭司が

出稼ぎ先には存在しない。21世紀に入り、ミエンの祭司の多くが高齢者となっており、高齢者の多くは村で暮らしているからである。儀礼をいかに維持するのかが、前述はしなかったが、都市部に暮らすミエンの人びとが抱える問題のひとつである。出稼ぎに出た者たちは、ミエンの正月や、彼らは儀礼が必要なときには、P村に戻り祭司を探し、儀礼を行ってもらわなければならない。この儀礼の際に用いる家畜は、P村で暮らしている者に頼んで、購入することが多かった。出稼ぎ者が増加したことで、儀礼に用いるための家畜に対する需要が生まれ、庭先で飼育していたニワトリやブタが現金収入源のひとつになりつつあることが指摘できる。

また、出稼ぎ者たちは、出稼ぎに出る際に、彼らが利用してきた農地を、休耕地にせず、希望者に貸し出すことが多かった。ゴム園を持っている場合には、ゴム園の管理を村の者に任せて出稼ぎに出ている。村で農業に従事する者から見ると、出稼ぎに出る者が現れることは、使える農地が広がったり、ゴム園から副収入を得る機会になったりしていることが指摘できる。

出稼ぎという活動について、出稼ぎ先での収入ばかりでなく、出稼ぎ者と母村との関係にも着目することで、供犠に利用するための家畜への新たな需要や、出稼ぎに出る者が村に残す土地の利用のされ方など、出稼ぎ者が現れることで村内に新しく生じる現金収入源や村民の関係を見いだすことができた。出稼ぎという活動を、出稼ぎ先の活動だけでなく、都市＝農村との関係の視点から捉えることが重要であることが指摘できる。

今回の調査を通じ、豆乳販売業に従事している者たちが、共通して豆乳販売業を長く続ける仕事ではないと考えていたことが印象に残っている。このことは、彼らが豆乳販売業が一段落したのちに、P村に戻ることを意味しているのではなく、彼らが豆乳販売業に執着していないことを意味していると考えている。P村で働くよりも、都市に出て働いた方が大きな収入を得られる可能性が高い現状においては、都市への人口の流出は続くものと思われる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

増野高司、チョンブーニック・ロムワタナタム(2017)「バンコク・サイアムスクエア界隈における牛乳事情」『家畜資源研究会報』16:21-25。(査読なし)

増野高司(2016)「タイ北部に暮らすミエンの食文化におけるニワトリの重要性」『家畜資源研究会報』15:14-19。(査読なし)

増野高司(2015)「ニワトリとブタの供犠 - タイ北部に暮らすミエン族の事例 - 」『生き物文化誌学会 ビオストーリー』23:24-27。(査読付き)

Nguyen Van Du, Bui Hong Quang, Nguyen Thi Van Anh, Tran Van Tien, Masuno T., and Peter J. Matthews. 2015. "Useful aroids and their prospects in Vietnam". *Aroideana*. 38E(N1):130-142。(査読付き)

Masuno, T. 2014. "Livelihoods of hillside areas in the past and the present: Mien (Yao) people in Northern Thailand". In: Mekong Sub-region Social Research Center ed. *Changing Way of Life of Ethnicities in the Mekong Region*. Ubon Ratchathani (Thailand): Faculty of Liberal Arts, Ubon Ratchathani University. pp.35-53.(査読付き)

[学会発表](計11件)

増野高司(2017年7月8日)「ミエン族の出稼ぎに関する研究 - 東北タイにおける豆乳販売の事例 - 」『日本タイ学会第19回研究大会』法政大学市ヶ谷キャンパス(東京都・千代田区)。

増野高司(2017年6月24日・25日)「タイ北部に暮らすミエン族の食文化 - 出作り小屋での食事 - 」『生き物文化誌学会第15回学術大会』国立民族学博物館(大阪府・吹田市)。(ポスター発表)。

増野高司(2017年6月25日)「花見と場所取り - 西の丸庭園(大阪城公園)の事例 - 」『生き物文化誌学会第15回学術大会』国立民族学博物館(大阪府・吹田市)。

増野高司(2016年1月10日)「タイ北部のミエン族が暮らす山村における食と環境利用」『料理の環境文化史公開セミナー』国立民族学博物館(大阪府・吹田市)。

増野高司(2015年7月11日)「タイ北部に暮らすミエン(ヤオ)族の食文化の理解に向けて」『日本タイ学会 第17回研究大会』東京学芸大学(東京都・小金井市)。

増野高司(2015年6月28日)「花見と場所取り - 円山公園(京都市)の事例 - 」『生き物文化誌学会第13回学術大会』中央大学後楽園キャンパス(東京都・文京区)。

増野高司(2015年6月27日-28日)「東北地方に広がる芋煮会文化の理解に向けて - 馬見ヶ崎川(山形市)の事例から - 」『生き物文化誌学会第13回学術大会』中央大学後楽園キャンパス(東京都・文京区)、ポスター発表。

増野高司(2015年3月27日)「都市部への出稼ぎ者の増加にともなう家畜利用の変化 - タイ北部のミエン族の山村における事例 - 」『第15回熱帯家畜利用研究会』馬の博物館(神奈川県・横浜市)。

増野高司(2014年10月12日)「青森県の花見 - 花見ガニ(トゲクリガニ)食に着目して - 」『日本民俗学会第66回年会』岩手県立大学滝沢キャンパス(岩手県・滝沢市)。

Masuno, T. (September 11, 2014) "Experiences of working overseas: A case study of the Mien (Yao) ethnic minority in northern Thailand". *The 3rd MSSRC International Conference on "Mekong Region and ASEAN in Transition: People and Transborder Issues"*. Ubon Ratchathani University (Ubon Ratchathani, Thailand)

Masuno, T. (August 18, 2014) "Case Study on Cockfighting Activities in Phayao Province, Northern Thailand". *Seminar of The Human-Chicken Multi-Relationships Research Project II*. (Tokyo, Japan).

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕
とくになし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

増野高司(MASUNO, Takashi)
総合研究大学院大学・先導科学研究科
・客員研究員
研究者番号: 40569159

(2) 研究分担者: なし

(3) 連携研究者: なし

(4) 研究協力者: なし